

胸部画像診断 気になるあの所見

—異常，それとも正常変異 / 偽病変？—

序 説

室田 真希子 *

放射線科としてキャリアを積み始めた頃、私は“疾患を診断する”ことに意識が向いていた。しかし、上級医が臨床医より「ここが変にみえるが、病的異常なのか？」と、“気になる所見”を相談される場面を度々目にした。“気になる所見”は、疾患（病的）ではない“偽病変”や“正常変異”のことも多く、上級医より病的ではない旨を説明された臨床医が安心し、感謝して帰っていく姿を何度も目にした。自分も同じような相談を受ける機会が増えるにつれ、“気になるけれど、病的かどうか判断しづらい所見”を正しく扱うことが、臨床医からの信頼につながると強く実感するようになった。

このように画像診断には、正常か病的か判別が難しい所見も多い。特に初学者にとって、加齢性変化、ある種の正常像、正常変異、偽病変は診断上の大きな悩みどころであり、時に“病的異常”とみなされて、不要な経過観察や追加検査につながることもある。一方で、軽視されがちな所見の中に見逃してはならない疾患が潜んでいることや、正常変異であっても臨床的に意味をもつ場合もあり、その判断には経験だけでなく、体系的な知識が欠かせない。

本特集では、このような胸部画像で遭遇しやすい“判断に迷う所見”について、その背景や押さえておくべきポイントを、部位別にわかりやすくまとめていただいた。こうした構成に沿って執筆をご担当いただいた先生方からは、初学者が実際によく疑問を抱く内容や、教育的観点から「ぜひ、ここは伝えたい」という熱のこもった視点が多く寄せられている。

各項では、加齢性変化、正常像、正常変異、偽病変に加え、いわゆるピットフォールとなりうる異常像まで幅広く取り上げ、症例ベースでわかりやすく解説していただいた。鑑別診断のポイント、その所見をどのように扱うべきか、必要に応じて臨床的意義や治療との関連性にも触れていただき、日常診療に直結する内容となっている。

本特集を通じて、読者の皆様が“気になる所見”と向き合う際の判断力をより高め、病的異常との鑑別精度の向上に役立てていただければ幸いです。また、こうした知識が、臨床医とのコミュニケーションをより円滑にし、質の高い画像診断と診療連携に寄与することを期待している。

* 香川大学医学部放射線医学講座

Makiko Murota Department of Radiology, Faculty of Medicine, Kagawa University